

気になる言葉② 情報

佐々木 隆

現代を解明かすキーワードのひとつに「情報」がある。情報文化、情報化社会、情報通信ネットワークなど、情報の入った表現は多様化している。そもそも「情報」と一体何であろうか。

コンピュータ用語では、「データ」と「情報」は明確に区別されている。情報作成のための資料が「データ」

であり、これがプログラムに従って処理・加工されると、特定のニーズに役立つ「情報」が生まれるのである。もともと日本で「情報」という言葉が登場したのは、一八七六年の酒井忠恕訳『仏国歩兵陣中要務実地演習軌道典』と言われている。resenimentsの訳語として「情報」という用語が使われた。軍事用語として登場した「情報」には、「諜報」の意味があり、そこには「機密」といった「秘密」めいた意味合いが込められていた。informationやintelligenceの違いと違ってよいかもしれない。ちなみに、アメリカの中央情報局はCentral Intelligence Agency(通称CIA)である。また、一九四九年にクロード・シャノンが数学的に理論化した一般通信情報理論など、情報にまつわる理論は時代と共に意味の多様化が進んでいる。長尾賢他編『岩波情報科学辞典』(岩波書店、一九九〇年五月)には「情報」の項目がない。これは、「情報」という言葉

があまりにも広範囲にわたっているということと、コンピュータに通信機能が加わって来たことと関係しているかもしれない。この時点で「情報」を定義するのはあまりにも難しいという時期であったかもしれない。現代は「情報」をどんな意味でとられているのだろうか。『岩波国語辞典』（第五版、一九九七年十二月）には

- ① ある物事の事情についての知らせ。② それを通して何らかの知識が得られるようなもの。× information の訳語。「データ」が表現の形の面を言うのに対し、内容を言うことが多い。

とある。『広辞苑』（第五版、岩波書店、一九九八年十一月）には、

(information) ①あることがらについてのしらせ。

② 判断を下したり行動を起こしたりするために必要な様々の媒体を介しての知識

とある。「情報文化」の見出し語は両方ともない。『情報学事典』（弘文社、二〇〇二年六月）によれば、「情報」という概念については、いまだに広く社会的に認知された唯一の定義が存在するわけではない」と冒頭に掲げられている。

「情報」という言葉が外国語の訳語であるということとは、もともとは概念自体が日本にないものといえるかもしれない。「情報」成立の歴史を遡ると、一八五六年の村上英俊『五方通語』には「音信」、一八六七年の『改正増補 英和对訳袖珍辞書』に「知告」、一八八七年の野村泰享他訳『仏和辞林』に「状報」、一九〇七年の平塚平二郎他『新撰和独字彙』（第十八版）

には「常報」の訳語・見出し語が見られた。一九一一年には森鷗外が「藤鞞絵」の中で「情報」という言葉を使い始めた。

「情」という漢字の成り立ちを見れば、立身偏が入っていることが気になるところだ。つまり「人間の心」が入り込む余地があるということなのだろうか。本當に「人の心」が反映されているかは疑問だ。

「情報」と言えば、高等学校に「情報」という教科目が導入され、二〇〇七年四月には初めて卒業生が大学に進学して来る。さて、その高等学校学習指導要領の目標は次の様に明記されている。

情報及び情報技術を活用するための知識と技能の習得を通して、情報に関する科学的な見方や考え方を養うとともに、社会の中で情報及び情報技術が果たしている役割や影響を理解させ、情報化

の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てる。一〇

インターネットの普及により、今求められているものこそ、実は「倫理」の問題ではないだろうか。「知識」と「技能」の習得は、使用する者の「倫理」が伴って初めてその真価を発揮するのではないだろうか。「情報」では、最後にはやはり、「倫理」すなわち人間の心や精神が大きく左右することになるのだ。